いわゆる過疎地域の家族関係 (6)

——子どもに対する役割期待について（その1）[1]
山形県大蔵村沼台と島根県頓原町の比較検討——

松田　惺[2]・続　有恒　ほか　過疎研究グループ

I　問　　題

すでに序報（続ほか，1970，1971）において，われわれは，本研究の意図と具体的な手続きについて明らかにし，あわせて調査対象として選びだした5地域の概要についても述べてきた。また，そこでは，「いわゆる過疎」現象を生ぜしめてくる要因について，とくに人間の生き方の問題としてとらえようとする観点からの仮説を，あわせて提起してきた。

本論の意図するところは，その流れに沿っての展開であり，「過疎」の原因そのものの追求というよりは，人口流出現象，いわゆる過疎現象が，それぞれの「過疎」地域に居住する人たちにどのような影響を及ぼしているかを明らかにしていくことである。同じ村内の親戚や知己が，先祖伝来の土地，農業に見切りをつけて都会へ出ていく時，あるいは，若い世代が次々と都市へ出て行ったまま帰ってこようとはしない時，当然，村にとどまる人たちに微妙な蔭をおとしていく。その影響のあらわれ方を，構成されない面接調査の資料に基づいて組織的に構成してみようと意図する。

その際，この報告においては，旧来の農村の家族関係を規定していた「家」の意識，特にその中核となる「家業」をとりあげ，その「家業」を通しての，世帯主が「あととり」に対して持っている役割期待と，「あととり」の持つ役割意識に焦点をあわせた。勿論，ここでは，主として世帯主になされた面接調査であるために，われわれが入手できたものは，世帯主が子どもに対して持つ役割期待であり，また世帯主が認知した，あととりの側の役割意識の状況である。その2面についての関連を探っていくことを意図するのであるが，その役割期待・役割意識の関係をつなぐものとして，さらに，世帯主が「家業」について持つ意識（職業人としてのアイデンティティ）が重要な側面として取り上げられることになる。

いわゆる過疎が進行していく中で，このような役割関係のあり方にどのような特徴が示されてくるかを，得られたいくつかの「過疎地域」の比較検討を通して明らかにしようとするのが本論の目的である。

そしてまたここでは，本調査におけるような，非構成的な面接記録から，意図する側面についての資料なり仮説なりを，どのように構成していくかという方法の問題も，あわせて検討されることになる。

II　方法及び手続き

1．対　象

われわれが調査を行なった5地域についての概要は，すでに序報（続ほか1970，1971）において述べられ，各地域の対象家族についての面接資料は公刊されている。この得られた逐語記録を研究の目的に沿って分析していくことが課題となる。

本論においては，分析の対象として，島根県頓原町と山形県大蔵村沼台地区をとりあげた*。この2地域に限定したのは，第1には，この2地域が，いわゆる過疎の形態をとらえていくとき，中国地方の「挙家離村型」と東北地方の「常時出稼ぎ型」との対比において検討をすすめることのできる利点があったことと，第2には，このような非構成的な資料の分析にあたって，その方法を確立せねばならず，多量の資料を一時に分析することが困難であったことによる。

2．資料分析のステップ

第1ステップ：面接記録の中から，「子どもに対する役割期待」「自分の家の家族関係」「若い世代観」「世代間関係一般」「職業観—自分の職業について」といった枠組みに合致すると思われる面接記録のすべてをとりだす。

第2ステップ：得られた記述を，「後継者である子ど

1）本研究の概要は，日本教育心理学会　第14回大会（1972年　お茶の水女子大）において報告した。

2）名城大学教職課程部助教授

*「島根県頓原町における採集資料」名古屋大学教育心理学科　研究資料 No.1，1971
「山形県大蔵村沼台地区における採集資料」名古屋大学教育心理学科　研究資料 No.4，1971

表 1　あとつぎ問題に関しての，後継者に対する親側の態度・役割期待

カテゴリー	内　　容	応　　答　　例	基本的感情
1.信　頼	後継者に関して，現に後を継いでいる，あるいは将来継いでくれるはず，といった発言。後継者本人の意志を忖度した上での発言。それが，後を継いでいる現状への同情的発言となっている場合もある	◦自分がやれなくなったら，今の勤めをやめて，農業第1でやってくれるだろう。 ◦若いうちは遊んで，嫁さんもらってから一所懸命働らけばいい。 ◦若い者は出稼ぎで常に仮の宿，かわいそうだ。	安定感
2.強　制	後継者本人の意志にかかわりなく，親がその権威を発動して，命令，強制することによって後継者を確保していることを示唆する発言。	◦やれる間はやって，いよいよだめなら，帰ってこさせる。 ◦就職させると戻らなくなるので，就職させていない。 ◦農業をやる気になってもらわないと困る。	
3.批　判	後継者が後を継ぐことを前提にしていると思われる，より一層の向上を期待する叱責的な発言。	◦若い人は勉強が足りないと思う。 ◦（若い人は）真剣に考えていない。 ◦自分たちも若い者のことを心配していることを理解したらどうだ，と思うことがある。	
4.不安を伴った期待	後継者が後を継いでくれるであろうと，幾分不安げな調子で，期待を述べる。嫁が来てくれれば，期待が満たされそうだ，という場合も含める。	◦誰か一人は面倒を見てくれるだろう。 ◦嫁がなかなか来てくれなくて……。	
5.甘やかし	後継者のご機嫌をとり結び，甘やかすことによって引き止めておこうとする意図の明白な発言。	◦百姓をやると言っているとすれば，買ってほしいというものは，黙って買っておかねばならない。 ◦あまり言うと，こんな所でなくても食べるところがある，という気をおこされると一番困る。 ◦青年のいうことを勉強しなくては。	不安感
6.依　存	後継者に依存しなければやっていけない。そのための見通しの欠如した依存の表明。	◦子どもが出てこいと言えば，出ていくことになる。 ◦子どもについて行く形。 ◦働けるうちはいいが，働けなくなったら息子に頼るしかないのではないか。	
7.混　乱	とまどい，混乱してしまい，何らの結論をも導き出せずにいる状況を述べた発言。	◦「田を」ともいえないし，「どうなろうといい」ともいえない。 ◦本人の希望がどうなるかわからない。 ◦国がはっきりしないので，親が一番困っている状況だ。	
8.あきらめ	期待について触れず，好ましくない，あるいは否定的な状況をそのまま受け入れようとする発言。	◦後を継がせることは全然考えていない。 ◦農業をやってもらいたいと思ったが，今のままではどうにもならん。どこか勤めに出して，また年が寄ったら帰ればいい。 ◦時世がそうさせる。	危機感
9.放　任	後継者に対して，積極的に自由度を認める発言。	◦本人本位，やりたいことをやらせる。 ◦親の特権で子どもを動かそうとは思わない。 ◦子どもを押えるわけにもいかない。 ◦若い人が残らんのは当然だ。	
10.孤立化	全く期待について述べず，孤立化していき，自棄的，なげやりな発言。	◦どっちみち最後は1人だ。 ◦自分の代だけはどうやらこうやらやっていく。 ◦子どもの所がだめなら養老院がある。 ◦子どもに頼っていてもつまらん。 ◦あまりアテにしていない。	
11.子どもに対する援助一般	親としての義務を果そうとしていることについての発言。あるいは，子どもへの献身的な努力についての発言。	◦高校を出るまではなんとか頑張らなくては，と思っている。 ◦何か手に職をつけさせたいと思っている。 ◦財産をほとんど売って大学までやった。	中性的

表 2　後継者としての役割意識についての，親側の認知

カテゴリー		内容	応答例
A 受容的役割反応	1.積極的役割受容	後継者が積極的に後を継いでいこうとする動きを認知している発言。	◦もう自分がやれるようになったら譲ってほしい，という考え方でいる。 ◦若い人にかなり自覚が生まれた。都会で将来を考えて，やはり家がいいと。 ◦やっぱり自分でやらなくては，と思っている。
	2.消極的役割受容	諦め，止むを得ず，といった程度であり，辛うじて後継ぎにつながっていると見ている発言。不確定的な要素も含める。	◦いやでも継がなければならないものとしている。 ◦長男は出るに出られぬ，長男だからという諦めもある。 ◦村にいてやるという感じだ。 ◦勤めに出ていい所でなかったら帰ってくるかもしれない。
B 拒否的役割反応	3.自己中心的傾向	安易な生活を志向する構えについての指摘。親の権威の失遂，独立・自立の動きもここに含める。	◦（若い者は）思うようにやっている。 ◦（若い者は）個人の権利を主張することが多くなってきた。 ◦1つの作物にも心を注いでつくらない。 ◦親からあてがわれた生活はいやだという。
	4.現金収入（出稼）志向	家業には結びつかない現金収入，あるいは出稼ぎによる生計維持への志向についての指摘。	◦目先のてっとり早い仕事にとびつく。 ◦現金収入が確実で，安易な出稼ぎに走ってしまう。
	5.都市生活志向	都会，都市へ出ていこうとする構えの指摘。技術を身につけて都市で働らこうとする構えも含まれる。	◦都会の方がいいだろうと思う。 ◦外へ出た方が良いと言う。後取りはいやだという。 ◦勉強したいという。 ◦眼は都会へ向いている。 ◦あっさり財産を処分して都会へ出てこいという。
	6.むら生活拒否（農業拒否）	むらでの生活，あるいは農業による生活を明らさまに拒否する発言。	◦百姓しなくても，いくらでも食べていかれるから出てこいと，いう。 ◦農業に魅力がないらしい。 ◦半年も何もしない所には住めない，農業なんてバカらしい，という。 ◦ここで生活したくないという気持を持っていると思う。
	7.役割意識不明確	子どもがどのような役割意識をもっているのか不明確であることの指摘	◦どういう考えをもっているかわからない。

もに対する役割期待」，「子どもの後継者としての役割意識についての，親側の認知」，「親（世帯主）の職業人としてのアイデンティティ」の3側面に分類する。

第3ステップ：それぞれの側面について得られた記述を，近似した意味をもつものに分類し，各側面毎の分類カテゴリーを設定する。あわせて，各分類カテゴリーについて，該当する応答頻数をチェックする。

第4ステップ：得られた各分類カテゴリーの応答頻数について，地域別，年齢階層別，職業・資産別に検討を行なう。

第5ステップ：2地域の質的な比較検討を行なうための一つの試みとして，年齢段階，家族構成，資産等でほぼ対応するような家族を幾組か選び出し，事例的な分析を行ない，第4ステップで得られた量的な処理をこえて一歩進めた検討を行なう。

3. 資料分析のカテゴリー

上の第3ステップで述べたように，面接記録を分析可能なデータとしてまとめていくために，分析のカテゴリーを設定した。表1～3に各分類カテゴリーの内容及びそのいくつかの例を掲げる。なお，このカテゴリーは，得られた発言の一つひとつについて，独立に分類しようとするためのものであり，それらのカテゴリーへのチェックの頻数によって，最終的に各対象家族の特徴を明らかにしようとするものである。従って，同一対象において，いくつかの矛盾するカテゴリーに属する発言が見られることも少なくない。

表 3　親（世帯主）の職業人としてのアイデンティティの様相

カテゴリー		内容	応答例
A アイデンティティ維持	1.アイデンティティ安定	現在の職業に対して信頼をおくとか，将来の見通しについても安定性を感じさせる発言。積極的に現状を開拓発展させようとする構えなど。	◦米が売れなければ米つくりなんかしない。ヤミで売ればどれだけでも売れる。 ◦現金収入のためには，ここでは酪農がいいらしい。 ◦百姓なら，いくら病気しても田畑は休まないし，食っていける。 ◦減反して野菜つくれば，都会の人にもよかろう。
	2.現状維持志向	不安定ながら，なんとか現状を維持しよう，あるいは維持していける，といった発言。他になすべきもなく仕方なしにやっている，という構えもここに含まれる。	◦つまらんと思うが，誰かが作らねば…。 ◦まだ追いこまれてはいない。 ◦出稼ぎに行く気にもなれない。 ◦雪さえ降らねば，そんなに悪い所ではない。 ◦工場などを誘致すれば住みつくだろう。
B アイデンティティ混乱	3.外的圧力（政治）への屈服	政策上の問題，あるいはその故に自分の職業に対して投げやりになったり，又は職業を変えざるを得なくなることの指摘。	◦政治が農業をやめて工業へという方向に自然にしている。 ◦減反で零細農家をしめつけてくるようだ。 ◦政府は「百姓は首をつって死ねばいい」という。勝手だ。
	4.現金収入（出稼）志向	現金収入あるいは出稼ぎをせざるをえない状況についての発言。	◦金をとらなければ，農業だけではやっていけない。 ◦いい仕事があれば，出ていかなくてよいのだが。 ◦出稼ぎの方が仕事が楽だ。 ◦あっさり出稼ぎに行った方がいい。
	5.都市生活志向	都市生活を積極的に肯定するような発言。	◦都会では悪い悪いといいながら，1人で年間70～80万円の水揚げがある。 ◦年令にあった職場や家を提供してくれれば，いつでも出ていく心構えでいる。
	6.自己の職業の否定	自分自身の職業をあからさまに拒否する発言。工場誘致などの可能性がないことについての発言など。	◦百姓だけではやっていけん。 ◦農業なんか止めてしまえという気になる。 ◦農業に見切りをつけている。 ◦工場誘致を期待しても，所詮は無理だと思う。
	7.アイデンティティ拡散一般	自分自身の職業について，明確な方向をつかみ得ず，混乱した状態にあることを示唆する発言。	◦親自体が自信がない。 ◦何をしていいのか，どうなるのか，全く迷っている。 ◦明るいめやすはない。 ◦過疎にならねば解決がつかん。 ◦将来の見通しはあまり良くない。

また，これらのカテゴリーは，面接記録の発言のニュアンスをふまえて分類構成されたものであり，あらかじめ仮説的に構成された枠組みに基づいて作成されたものではない。さらに，資料集における発言の単位は，必らずしも一貫したものではなく，カテゴリーに分類していくとき，1つの発言単位とされているものが，異なった意味をもつカテゴリーにまたがってチェックされる場合もあった。これも，資料の性質上やむをえないものと思われる。

なお，カテゴリーへの分類，チェックは，すべて筆者単独で行なった。

Ⅲ　結果及び考察

1．応答カテゴリーの分析による2地域の比較

i）後継者への役割期待について

手続きの項で述べたように，ここでは，とくに後継者への広義での役割期待の側面に焦点づけて検討しているのであるが，島根県頓原町（以下「頓原」）と山形県大蔵村沼台地区（以下「沼台」）の2地域における，各カテゴリーへの応答出現数は，以下の表に示される。

表　4－1　　後継者に対する役割期待・態度

カテゴリー	頓原町（島根県） 事例数*(39)	コメント数**	年齢水準別（事例数） 40才代以下(13)	50才代(5)	60才代以上(6)	その他***(15)	職業（事例数） 農業 1ha以下(15)	1.1ha以上(14)	その他***(10)	大蔵村沼台（山形県） 事例数(40)	コメント数	年齢水準別（事例数） 40才代以下(9)	50才代(12)	60才代以上(9)	その他(10)	職業（事例数） 農業 1ha以下(14)	1.1ha以上(19)	その他(7)	基本的感情
1. 信頼	15	25	4	3	3	5	5	5	5	22	35	4	5	7	6	6	12	4	安定感
2. 強制	8	11	3	1	2	2	2	4	2	14	24	3	5	2	4	1	9	4	
3. 批判	3	8	0	0	2	1	1	2	0	5	7	1	1	0	3	3	2	0	
4. 不安を伴った期待	12	15	4	1	1	6	3	6	3	9	13	4	1	3	1	3	3	3	
5. 甘やかし	6	8	4	1	0	1	2	1	3	9	23	2	3	2	2	2	5	2	不安感
6. 依存	6	10	2	0	1	3	3	2	1	4	4	2	1	0	1	4	0	0	
7. 混乱	8	17	5	0	1	2	2	2	4	5	9	2	1	1	1	3	2	0	
8. あきらめ	18	33	8	2	3	5	6	5	7	6	6	0	3	2	1	3	2	1	危機感
9. 放任	15	27	8	2	2	3	7	4	4	3	4	0	2	0	1	2	1	0	
10. 孤立化	13	19	6	2	1	4	6	3	4	2	3	0	1	0	1	1	1	0	
11. 一般的援助	13	17	5	2	2	4	4	3	6	1	1	0	0	0	1	1	0	0	中性的
計（コメント数のみ）		190									129								

*　カッコ内の数字は，その基準に合致する事例の総数をあらわす。
**　該当事例すべてについての，該当するコメントの総数である。
***　年齢での「その他」は世帯主以外の者に面接した事例であり，職業の「その他」は大工，獣医等の職をもつものである。

表4－2　後継者に対する役割期待（パターン）

パターン群	頓原町	大蔵村沼台	計
安定群	5	15	20
アンビバレント群	13	14	27
悲観群	15	5	20
不明群*	6	6	12
計	39	40	79

$\chi^2=10.024$ ($p<.01$)
*　何らのコメントが述べられていない事例を示す

まず表4－1においては，後継者に対する態度あるいは役割期待の様相が，各カテゴリー別に示されている。

この表4－1より読みとられることは，第1に，一応の安定感を前提にしていると思われる「1.信頼」「2.強制」などのカテゴリーに入るコメントが，沼台の方に多く見られること。そして，逆に，将来への危機感を伴っていると思われる「8.あきらめ」「9.放任」「10.孤立化」などのカテゴリーに入るコメントを，頓原のより多くの事例が述べていることが指摘できる。

第二に，耕作面積によって対象を分けてみると，事例数が少なく，明白な傾向とは言い難いが，幾分耕作面積の大きい方が，子どもに対してより安定した強い姿勢をとっているように思われる。

表4－1の右側に示した基本的な感情状態という観点からさらにパターンにまとめてみると，表4－2が得られる。1から3までのいずれかの項目，または4をもあわせた上でのいくつかの項目にのみ該当する応答が得られた場合を「安定群」*とし，5以下10までのいずれかの項目に該当する応答がみられた場合を「悲観群」とする。また，この両項目群に応答が分かれている場合を「アンビバレント群」，全く言及のないものを「不明群」とする。

結果にみられるように，これは明らかに統計的な有意差を示すものであり，沼台では，「信頼」・「強制」・「批判」・「不安を伴った期待」などを包括した，一応安定した役割関係を述べる者が多く，頓原では，「あきらめ」・「放任」・「孤立化」といった危機的な感情を中核にした悲観的な見方を述べる者が多くなっている。

ii) 後継者としての役割意識について

子どもが後を，すなわち現在の家業を継ぐ気持でいるか，将来設計をどのように考えているかについて，カテ

*　単に「4」のみの応答が見られた場合は，「安定群」から除外した。

表 5－1　後継者としての役割意識についての親側の認知

カテゴリー		頓原町（島根県） 事例数*(39)	コメント数**	年齢水準別(事例数) 40才代以下(13)	50才代(5)	60才代以上(6)	その他***(15)	職業(事例数) 農業 1ha以下(15)	農業 1.1ha以上(14)	その他(10)	大蔵村沼台（山形県） 事例数(40)	コメント数	年齢水準別(事例数) 40才代以下(9)	50才代(12)	60才代以上(9)	その他(10)	職業(事例数) 農業 1ha以下(14)	農業 1.1ha以上(19)	その他(7)
A 受容的役割反応	1. 積極的役割受容	4	17	0	1	1	2	2	2	0	7	13	1	3	2	1	1	5	1
	2. 消極的役割受容	10	14	3	0	2	5	4	4	2	14	21	4	3	5	2	6	5	3
B 拒否的役割反応	3. 自己中心的傾向	8	11	3	1	3	1	6	2	0	13	27	3	3	4	3	5	8	0
	4. 出稼ぎ（現金収入）志向	3	4	0	0	2	1	2	1	0	5	5	1	2	1	1	1	4	0
	5. 都市生活志向	8	10	2	0	1	5	4	3	1	11	19	3	2	4	2	5	5	1
	6. むら生活（農業）拒否	14	23	5	2	3	4	7	6	1	13	16	2	4	5	2	7	4	2
	7. 役割意識不明確	6	8	2	3	0	1	5	0	1	4	4	1	1	0	2	3	1	0
計(コメント数のみ)			87									105							

*，**，***．すべて表4－1に準ずる

表5－2　役割意識についての親の認知（パターン）

パターン群	頓原町	大蔵村沼台	計
受容群	4	5	9
アンビバレント群	9	13	22
拒否群	13	12	25
不明群	13	10	23
計	39	40	79

$\chi^2 = 1.250$ (n.s.)

ゴリー毎の事例数とコメント数をまとめたのが表5－1である。そして，「A．受容的役割反応」のみを示した者を「受容群」，「B．拒否的役割反応」のみを示した者を「拒否群」，A，Bにまたがる者を「アンビバレント群」としてパターンによってまとめたのが表5－2である。このいずれにおいても，頓原と沼台との間に明らかな差は認められず，親の期待に応じて役割を取っていってくれると判断している事例は極めて少ない。アンビバレントであったり，現在の家業以外の生活を志向していると判断する者が多くなっている。この結果は，面接調査時点での視点が明確でなかったことに起因するものもあると思われるが，基本的には，現在の親の世代が，子どもの世代の役割意識について，必らずしも明確な認知を持ち得ないでいる，ということを示唆するものとみることができる。

iii) 職業人としてのアイデンティティについて

子どもに対する役割期待の基礎となる，自分の職業についてのアイデンティティの様相がどのような形で存在するかを明らかにするためにカテゴリーを設定した。

表6－1について，全体としての事例の出現状況を見ると，頓原に自分の職業を否定する発言がやや多く見られる以外は，あまり両地域間の差異はないようである。いずれも，積極的な安定感を述べている者が少なく，辛うじて現状を維持していることがうかがわれる。なお，年齢での区分を見てもあまり差が見られない。田畑の経営規模が幾分関連しており，1.1ヘクタールよりも大きい規模のグループが，1ヘクタール以下の規模のグループよりも，現状維持的な志向が見られ，一般的な予想との対応がみられる。

表6－2は，各事例毎にカテゴリーの分布のパターンによって分けたものであるが，全体として有意な差は得られなかった。ただ，「アイデンティティ維持群」が沼台の方にやや多く，「アイデンティティ欠如群」が頓原の方にやや多くなっていることは指摘できる。

iv) アイデンティティと役割期待に基づくパターンの分析

ここでは，上で分析した観点を綜合した形でのパターンに基づく分析を試みようとするものである。

分析のはじめに，「子どもの，後継者としての役割意識」をもあわせて検討したが，パターンが細分化されすぎ，また，解釈の際の手掛りとして有効性も乏しいと判断されたため，ここでは，「職業人としてのアイデンティティ」と「後継者に対する役割期待」の2側面に基づ

表6－1　世帯主の職業人としてのアイデンティティの様相

カテゴリー		頓原町（島根県） 事例数*(39)	コメント数**	年齢水準別（事例数） 40才代以下(13)	50才代(5)	60才代以上(6)	その他***(15)	農業（事例数） 職業 1ha以下(15)	1.1ha以上(14)	その他(10)	大蔵村沼台（山形県） 事例数(40)	コメント数	年齢水準別（事例数） 40才代以下(9)	50才代(12)	60才代以上(9)	その他(10)	農業 1ha以下(14)	1.1ha以上(19)	その他(7)
アイデンティティ維持	1.アイデンティティ安定	5	8	0	2	2	1	4	1	0	10	18	2	3	4	1	4	4	2
	2.現状維持志向	22	45	10	2	5	5	8	10	4	27	43	6	8	6	7	7	14	6
アイデンティティ混乱	3.外的圧力への屈服	7	14	3	0	2	2	3	4	0	6	8	1	1	1	3	1	4	1
	4.出稼ぎ（現金収入）志向	13	14	7	2	2	2	5	6	2	15	23	4	5	2	4	4	9	2
	5.都市生活志向	4	5	3	0	1	0	1	3	0	3	4	1	1	0	1	2	1	0
	6.自己の職業の否定	22	35	7	3	4	8	1	9	2	11	16	4	3	2	2	3	5	3
	7.アイデンティティ拡散一般	22	47	8	2	4	8	8	8	6	20	30	5	7	3	5	9	7	4
計（コメント数のみ）			168									142							

*，**，***．表4－1に準ずる

表6－2　職業人としてのアイデンティティ（パターン）

パターン群	頓原町	大蔵村沼台	計
維持群	3	8	11
アビンバレント群	21	23	44
欠如群	10	6	16
不明群	5	3	8
計	39	40	79

$\chi^2 =$ 3.842 (n.s.)

く類型化を試みた。表7－1は得られたタイプと，各タイプに属する事例の諸属性であり，表7－2は，各タイプに属する事例の番号である。

全体として，頓原，沼台の2地域間に有意な差が認められた。頓原の特徴としては，悲観的なニュアンスの強い「E．不安定孤独型」及び「F．なげやり型」の多いことが挙げられる。すなわち，頓原の事例の多く（54%）は，現在の自分の仕事に不安感やあきらめの否定的な気持を抱き，子どもに対しても何らの期待を持ち得ないまま，孤独の世界に入りこんだり，自棄的になったりしているのである。

一方，沼台においても，E，F，に属する事例もみられるが，「B．現職志向将来不安型」や「C．現職不安定子ども依存型」の多さが特徴的となっている。すなわち，現在の仕事を続けながらも，子どもが後を継いでくれるかどうかに期待と不安のいりまじった状態でいる事例とか，現在の職業には否定的な構えを示しながら，子どもに新しい生活への期待をつないでいる事例などが多く見られている（48%）。

さて，それぞれのタイプについて，さらにいくつかの指標に即した結果を分析したのが表7－1の右側部分である。ここでは事例数が少ないため，両地域は合計されており，χ^2検定にあたっては，タイプA～Cと，タイプE・Fとがそれぞれまとめて処理されている。一般的傾向として，男子の後継者が村内で同居していなかったり，あるいは田畑の経営規模が小さかったりする場合に，D，E，F等のタイプが多くなる。また，年齢段階が若くなれば，それだけ不適応的なパターンを生じてきていることも知られる。

これらは，一般的に予想される傾向を裏づけるものであるが，特に，後継者が居ても，あるいは経営規模がかなり大きくてもなおE，Fのタイプに属する者があるのは，親の年齢が若く，従って後継者の年齢の低い場合があるためである。子どもが未だ小学校に在学しているような場合，激しい時代の流れの中で，親はとうてい子どもに対して十数年後の期待を託すことはできないのであろう。

2．対応事例による2地域の比較

上で，応答をカテゴリーに分析することによって量的な分析を行なったのであるが，両地域の差異をより具体的に記述するために，個別的な事例をとりあげて検討してみる。

表7－1　アイデンティティと役割期待に基づくタイプ分類（事例数）

タイプ	応答パターン*		地域別			後継男子**		職業			年齢			
								農業		その他（含不明）				
	アイデンティティ	役割期待	頓原町	大蔵村沼台	計	有	無	1ha以下	1.1ha以上		40才以下	50才代	60才以上	世帯主***以外の者
A 現職志向安定型	＋	＋	2	2	4	3	1	2	1	1	1	2	0	1
B 現職志向将来不安型	＋	±・－	1	6	7	6	1	2	4	1	1	2	4	0
C 現職不安子ども依存型	±・－	＋	3	13	16	16	0	3	9	4	2	3	5	6
D とまどい，不安定型	±	±	12	12	24	18	6	11	9	4	9	3	5	7
E 不安定孤独型	±	－	12	3	15	8	7	6	5	4	7	3	1	4
F なげやり型	－	±・－	9	4	13	7	6	5	5	3	2	4	0	7
計			39	40	79	58	21	29	33	17	22	17	15	25
χ^2検定****			χ^2=17.136(p<.01)			χ^2=10.784 (p<.01)		χ^2=4.137 (n.s.)			χ^2=64.044 (p<.01)			

*　表4－2，5－2，6－2における「不明」の事例は，「不安」群とあわせて±としている
**　「有」は年令を問わず，世帯主と同居している場合はすべて含める。「無」は都市に職業を持ち，別居している場合を含む
***　世帯主の父母，妻等に面接した場合である
****　「地域別」以外は点線による区分に基づき，3×nのχ^2検定となっている

表7－2　各タイプに属する事例一覧*

タイプ	頓原町	大蔵村沼台
A	412，438	228，230
B	411	217,218,229,234,236 238
C	408，420，430	201,202,204,206,210 215,222,226,227,231 232,237,239
D	405,407,418,419,421 426,427,428,435,436 437,439	203,205,207,211,212 213,216,219,220,224 225,233
E	402,404,409,413,414 415,416,422,423,425 431,434	223,235,241
F	401,406,410,417,424 429,432,433,440	208,209,214,221

*　ゴチックは，次項で事例としてとりあげた対象家族の番号である

事例の抽出の方法としては，表7－2に示された各タイプについて対応する事例をとりだしてくる方法も考えられるが，ここでは，まず田畑の経営規模に焦点をあわせ*，特に農業を主とする家族について，その後継者の存在という点でも対応している事例を，40歳代，50歳代，60歳代それぞれについて各1事例ずつ引きだしてきた。表7－2の中のゴチックの事例番号が，ここで検討される事例である。以下に，各事例の記述を提示し（表8），対応する年齢段階ごとに比較検討してみる。

i）60歳代の事例について

まず，60歳代で，種々の点で対応のあった事例は，同じように長男夫婦が同居し，あととりの孫もあって，家族構成としては安定しており，農業にあわせて酪農を行なっていることなどの点で共通している。ところが，後継者に対する役割期待や自己の職業についての見通し等について，大きな考え方の差異のあることがわかる。

まず，頓原の事例〈407〉の場合，「世の中が変わった（29），「その時世になってみないとわからない（93）」といった，投げやりな不確定的な態度を持っており，後継者も一ぽつぽつ年だから，外へ出たいとは言わない（31）」といった，非常に消極的なとらえ方しかなされていない。

一方，沼台の事例〈217〉の場合は，不安な感情を背景に持っていながらも，「うちでは順調にきていた（73）」し，「多分継いでくれるだろう」という一応の期待をつないでいるのである。

農業についても，頓原の事例が，投げやりで「農業なんかやめてしまえという気持になる（43）」のに対し，沼台の事例は，農業，とくに酪農が，「出稼ぎよりは収入は少ないが，家内中でやっていけるから，金は細いが将来性はあるんじゃないか（55）」といった，楽観的ともいえるほどの意見を出していることは，注目すべき差異

*　ほぼ中間ぐらいの経営規模にあたる。

であろう。

ii) 50歳代の事例について

両事例ともに，若い後継者が居て，彼らが出稼ぎに出ている，そして未だ嫁は居ない，といった条件で類似している。60歳代の事例とはちがい，考え方にかなり接近が見られるといってよい。沼台の事例〈210〉の場合，「若い者に農耕を生かすためには，私の家では買うことをやらせていない（33）」という積極的な態度を示しながら，一方で，「良い品物が安く買える。労賃で買った方が安くて良い物が買えることは確かだ（32）」と認めざるを得ないのである。そして，自分と長男とが共に出稼ぎに出ていることを肯定する発言（75）を通して，後継者である長男へのつながりを願っている。

頓原の事例〈410〉の場合は，やはり長男が出稼ぎに出ているが，「世間体ということもあるので，長男が家を捨てることはない（35）」ことを期待しながらも，若者の，「こんな所でやっていても仕方がない（33）」という気持に共感し，自分たちも「こんな所で百姓していてもつまらないと思う(34)」気持もまた強いのである。なんとか，現状が持続することを念じながらも，将来について全く見通しを欠き，投げやりになっていると考えられる。

iii) 40歳代の事例について

この世代の場合は，両地域の事例ともに，若い後継者の気持を理解し，受け入れようとする構えが目立ち，その必然の帰結でもあろうが，古い世代との間にはさまれて，どうしようにも動けないいらだち，とまどい，といったものが示されてきている。頓原の事例〈405〉の場合は，「若い人が残らんというが，残らんのが当然だ（63）」と言い切っており，自分の子どもも「農業をすることを考えていない（102）」と認めている。そして，「過疎にならねば解決がつかん（63）」と思い，「何をしていいのか，どうなるのか，全く迷っている（109)」のである。

沼台の事例〈233〉においても，「若い者は，ここで生活したくないという気持を持っている（55）」と思い，「結局，いろんな角度から考えると先が暗い。やっぱりここで生活したってしょうがないということになる（25）」のである。「自分自身，ここ2～3年のうちに，どうすべきか，ふんぎりをつけねばならない。われわれの年代の者は出る所があれば出たい（56）」とさえ思っているのである。

iv) 対応事例全体を通して

上では，対応する年齢ごとに，その事例の比較を行なってきた。この6事例は，対象となった2地域においては，ほぼ平均，ないしはやや大きめの経営規模である。そのような共通性にもかかわらず，既に地域による差のあることを見てきたが，さらに，全体を通してみると，幾つかの違いに気づく。

頓原の場合，一方で後継者に対して信頼を置くような発言がありながら（410—19，20*；407—31，88），他方で後継者が拒否的であろうことを予期し（405—102；410—27，33；407—26，35，89），しかも，農業を持続していくことが困難であることも自覚しているのである（405—101；410—34；407—43）。後継者への役割期待において，「あきらめ」や「放任」の見られるのも特徴的であろう（405—101，104；407—36，93）。

沼台の場合は，後継者が継いでくれるかどうかに不安感を持って，「甘やかし」によるつなぎとめを考えているにしても（233—15，51，52；210—61；217—78，80），極端な破局感を感ずるまでには至っておらず，農業も，出稼ぎという形態の必要性を予期しながらも，なんとか持続しようとする構えが見られる（210—12，125；217—46，55）。

農業を持続することに困難があると認知している場合にも，頓原が「外的力の圧迫」，すなわち，政治の悪さによるやむを得ない状況（405—55，63，65，105，132；407—42）と断じる傾向があるのに対して，沼台の場合はその点に触れず，出稼生活への志向としてあらわれてきていること（233—28，56；210—75）などは興味のある差異といえる。この両地域において，農業を通しての外部社会へのつながり，あるいは政治へのつながりの，基本的なちがいを指摘することが可能であると思われる。

そして，こうした構えのちがいは，必然的に，子どもに対する役割期待の差異となってあらわれてきており，頓原の場合は，現在の状況が自らの責任において生み出されたものではないと思うだけに，「あきらめ」「放任」といった形での態度を作りあげてきていると考えられる。沼台の場合は，農業自体が未だ，いわば自我の一部にとりこまれており，大方は子どもが後を継いでくれることを前提としながらも，最近の過疎の進行に伴う若い青年層の動きを見ては，万一のことをおもんばかった「甘やかし」をしておかなければならないと考えるのであろう。

そして，上のような地域による差異はそれ自体として認めながら，40歳代に見られる否定的な面での共通性の高さは，今後の過疎の進行とあわせて，その評価は別にして，考慮しなければならない側面だと思われる。

---

*ゴチックは事例番号をあらわし，その右の数字はその事例での発言番号を示す。

表 8　島根県頓原・山形県大蔵村沼台両地区の対応例の比較

頓原60歳代　《D．とまどい不安定型》　ケース番号〈407〉62歳　農業（田畑1 ha，山林7 ha）乳牛　家族：妻・3男（38才同居，26才神戸，20才広島），2女（30才東京，22才東京）長男の妻，孫1男（中2）

〔自分の家の家族関係〕世の中は変わったし，家にはいらないという気持も親にあって，親としてはお前達の好きなようにしろ，と言ったわけです（29）。長男が跡をとった（30）。私が年をとっているし，子ども（長男）もぼつぼつ年だから，外へ出たいとは言わない（31）。（嫁も）40才ぐらいになれば，考え方もあまり違わない（88）。（孫にこの家を守ってほしい？）その時世になってみないとわからない。どちらがいいのかわからない（93）。

〔家族関係一般〕今は次三男は都会に出るのがあたりまえ。長男でも出て行ってしまう（26）。自分たちの時代では，長男が外へ出たいというようなことはなかった（32）。（長男に出られた家族は？）困るというより，時世がそうさせるという考えに至るわけです（36）。長男が出てしまった後の，老後の話は話題にならない。長男がだめなら次男に後をみてもらう考え方をしている（38）。

〔若い世代について〕中学生，高校生になると，百姓なんかなんだ，百姓なんかつまらん，何も裏づけがないじゃないか，という考えが出てきて，長男も出て行く（34）。昔は長男がどうしても跡をとるということだったが，今は自由勝手な行動をとる（35）。とにかく若い者がここに居つかないのは，可能性がないからだ（41）。若い者は都会の方がいいだろうなあと思う（89）。

〔職業について〕米は余るし，減反はするし，どうなっていくかわからない（42）。私が若かったとしても，農業なんかやめてしまえという気持になる（43）。

頓原50歳代　《F．なげやり型》　ケース番号〈410〉53歳　農業（田畑1 ha，山林5 ha）家族：妻，長男（25才），五男（中2）

〔自分の家の家族関係〕長男は（出稼ぎに）3年出ている（54）。（他の子どもたちは）たまに帰ってくる，お盆に帰ってくるくらいです（49）。

〔家族関係一般〕まだ親が若い家では（継ぐ人がいなくて困っている）。自分がやれなくなれば帰ってきて，なんとかやってくれるだろうと思って，現在やっている（19,20）。子どもは，大体，どこの家でも出て行く（26）。長男の人はあまり出ていない。次男以下が主に都会へ出ていっている（31）。世間体ということもあるので，長男が家を捨てるということはない（35）。昔は姑に気兼ねしてやっていたが，この頃は姑が嫁に気兼ねしてやらなければならないと，誰もが言われる（70）。「車を買ってくれなければ出る」と言われて，買ってやった家も

沼台60歳代　《B．現職志向将来不安型》　ケース番号〈217〉65歳　農業（田畑1.5ha，山林2 ha）酪農　家族：妻（59才），1男（36才同居），1女（41才村内，長男の妻，孫2　男（小4，7才），3女（16才東京，中1，4才）

〔自分の家の家族関係〕（跡つぎは長男？）現在はそういうつもりだが，果してどういうふうになるか，本人の希望がどうなるのか分からない（64）。多分継いでくれるだろう（65）。（孫）中学生にでもなれば，本人の納得がいけば跡を継いでもらうし，その後の子がどう言うか，まだまだ先のことだ（68）。（今まで）ここらでは全然問題なかった。うちでは順調にきていた（73）。

〔家族関係一般〕あまり分家をすると，狭くて生活に影響してくる。部落で話しあって，分家を出さないようにしよう，ということになった（36）。大体においては長男が残るし，どこを見ても長男は残る気でいるらしい（71）。なんとも仕方がない。親をみていかなくては，という決心をもっていると思う（72）。結局，長男だけが，誰も嫁に来てくれない。そうかといって，両親をほおって都会へ出るわけにもいかない。つらいものだ（92）。（村を出ていく人は？）第1に耕地不足ということ，それから嫁に来てくれる人がいない。それである程度子どもの言うことをきかなくてはならないと…（118）。

〔若い世代について〕今の子どもたちは，都会へ出たいという希望があるので（70）。親を捨てきれないのでやむをえず（跡を継ぐ）ということだ（69）。自分の若い頃はこうだった，などとガミガミ言えば，「それじゃ東京へ行く」と言われて困ることになる（78）。若い者のいうことを聞かないで文句を言っていると，嫁に来てくれる者もなくなる（80）。こういう社会になってきたので，自分としても青年のいうことを勉強しなくては（77）。

〔職業について〕このままではとても生活がやっていけない。今やっと酪農にたどりついた（46）。（酪農は）出稼ぎよりも収入は少ないが，家内じゅうでやっていけるから，金は細いが，将来性はあるんじゃないかと思う（55）。

沼台50歳代　《C．現職不安定子ども依存型》　ケース番号〈210〉59歳　農業（田畑1.2ha，山林4 ha）家族：妻（55才），3男（32才同居，23才浜松，17才同居），5女（30才東京，25才川崎，21才同居，19才同居，19才東京）

〔自分の家の家族関係〕（買った方が安くて良い物が買えるが）若い者に農耕を生かすためには，私の家では買うことをやらせていない（33）。（仏おがみ？）気持だけやる。親から引き継いだから行なっているだけである（90）。

ある(76)。本心で出たくて言ったのか，車が欲しくて言ったのかはわからない(77)。機嫌をとっておかないと「出る，出る」といって困る，と言っている人がある(78)。

〔若い世代について〕若い人と，今は立ち話程度で，話す機会があまり無い(23)。家にも若い者がいるが，個人的な話はするが，会合がないので，(青年の考え方は)よくわからない(24)。この町には仕事がないのですから(出ていくいのも)無理もない(27)。(若者は)こんな所でやっていても仕方がないと言っています。若いですからね(33)。

〔職業について〕私たちも，こんな所で百姓していてもつまらないと思う。まだ2年ぐらいは米がいらないようだし，考えてしまいますね(34)。こういう状態だから，将来はわからないですね(36)。

頓原40歳代　《D．とまどい不安定型》　ケース番号〈405〉48歳　農業(田畑1.1ha，山林5ha)　家族：妻，1男(高2)，2女(高1，中3)，世帯主の父母

〔自分の家の家族関係〕(子どもが)高校を出るまでは，なんとか頑張らなくてはと思っている(99)。最初は農業をやってもらいたいと思っていたが，今のままではどうにもならんということが，はっきりわかった。規模を拡げるわけにもいかず，どこかを開く場所もない。どこか勤める場所があれば，そこに出して，また年が寄ったら帰ることを考えている(101)。子ども自身は農業をすることを考えていない(102)。案外勤めに出てみて，いい所でなかった場合に帰ってくるかもしれない(103)。跡を継いですぐに田を，ということも言えないし，田はどうなろうと，もどらなくてもいいから，ということも言えない気がする(104)。

〔家族関係一般〕学校の先生は，親がちゃんとしないから，と言われるが，国がはっきりしないので，親が一番困っている状態(105)。

〔若い世代について〕若い人が残らんというが，残らんのが当然だと思う。後継者がない，過疎になっていくこと，政策自体が過疎になるようなことをしている。過疎にならねば解決がつかん(63)。

〔職業について〕一昨年までは増産，増産で声かけられて，去年まではよかったが，今年から減反(42)。来年は2割(減反)とわかっていると意欲は確かになくなる(55)。過疎にならねば解決がつかん(63)。過疎になっていいとは思わないが，今の国のやり方からみて仕方がないのではないか(65)。自分は百姓やめて何かという年令でもないし，他のことをならっていなかったので仕方なく，米がいけなければ牛でもということになる(87)。何をしていいのか，どうなるのか，全く迷っている(109)。希望がもてるものはない(122)。国の政治が，農業をやめて工業へという方に自然になるようにしている(12)。

〔家族関係一般〕若妻会がある。男は若衆組合がある。その若衆組合は年令の制限はないが，後継者に家を渡すと退会する(101)。若妻会の方に，婦人会に対する遠慮がある。若妻会が独断で講師を頼んだり新しいことをすることはない(104)。(転居は？)墓を持っているので，転出はなかなかできない。5人も6人もの家族を連れていくのだから。全く安全であることが保証された所でなければ行けない。やはり墓場を置いては行けない(125)。

〔若い世代について〕(野菜は)手間がかかるから若い者はやりたがらないし，教えてもらっても消毒もうまくいかない。結果的には良い物ができないので，買った方が安いという様になってしまう(34)。(以前は)労働がきつかた。今の若い衆にはとてもできない(60，61)。

〔職業について〕農業がしっかりしていないので大変だ(12)。良い品物が安く買える。労賃で買った方が安くて良い物が買えることは確かだ(32)。出稼ぎは怪我でもしないかぎり一番いい，資本がかからないから(75)。

沼台40歳代　《Dとまどい不安定型》　ケース番号〈233〉45歳　農業(田畑1.3ha，山林3ha)　家族：妻(39才)，1男(19才同居)，世帯主の父(67才)

〔自分の家の家族関係〕自分らは，牛の餌をやるために，父母に起こされて朝早くから草刈ったものだ。しかし，今，息子にそんなことさせない(15)。(息子は)何言っても，一つの作物つくるにしても，心注いでつくることはしない(16)。

〔家族関係一般〕最近は，生活の苦しさから，姑が嫁おもいになってきている(45)。18才以上になると，親の方が子どもを心配するようになる。いわば気嫌をとるようなものだ(51)。子どもが乗用車が欲しいといえば，買わねばならない(52)。

〔若い世代について〕若い者も，親と一緒に住むとしたら，嫁飢饉の問題もあるし，せめて車ぐらい持って，表向き派手さを見せたい面もあると思う(11)。俺達も，若い者のことを心配していることを理解したらどうだと思う(12)。若い者は，ここで生活したくないという気持を持っていると思う(55)。

〔職業について〕この土地で近代農業がやれるなんて，大ぴらに言えるかどうか。結局，土地がよくないのだ(17)。ほかの現金収入なしでは，農家1本では無理だ(20)。ここに居て，農業以外で生活をしようとすれば，酪農になるが，酪農だけでは無理である(38)。結局，いろんな角度から考えると先が暗い。やっぱりここで生活したってしょうがないということになる(25)。年令にあった職場や家を提供してくれれば，いつでも出ていく心構えでいる(28)。自分自身，ここ2～3年のうちに，どうすべきか，ふんぎりをつけねばならない。われわれの年代の者は出る所があれば出たいと思っている(56)。

Ⅳ 討　　論

われわれは，いわゆる過疎の進行に伴って，家族関係にどのような歪みみが生じ，どのような変質が生じてきているかを明らかにするために資料の分析を行なってきた。そこで結果として示されてきた問題のいくつかについて検討しておきたい。

まず，上の結果で示されてきた2地域間の差異の問題である。われわれも本来地域間の差異が認められることを仮定して対象地の選択を行なったのであるが，この差異が何に由来するか。

それは，今井（1968）も指摘するように，単に耕地面積の大小とか，機械化の進み具合などでは説明のできない何かがある。今井は，山形の山村から島根の過疎地へ調査に来た人のエピソード＊を通して，このちがいが，「長い歴史と伝統につちかわれた〝県民性〟と〝土地の所有観〟の違いとしかいい表わすことが出来ない。大ざっぱにいって西日本の人は商業性に富んでおり，利潤のあがらぬところならさっさと捨ててより有利な土地に移住する。それに較べ東北地方の人はまるで地の底から生えてきたように土着性が強い」ことを指摘している。

また祖父江（1971）は，東北型農村と西南型農村の対比を，農村社会学からの「社会経済史的」観点から，あるいは先史時代に逆のぼっての「種族史的」観点から分析を試みている。また，育児様式**のちがいについても触れている。

ここでは，結局，得られた2地域間の差異を説明しうる単1の要因は未だ見出されていないということが言えるのみであろう***。しかし同時に，既に結果で触れたように，40歳代の世代にみられるある種の意識上の共通性が，文明の画一化が進み，過疎状況が進展していく中で次第に拡大していく可能性も考えられるのである。このような意識上の共通性の増大が，今後どのように行動上の変化として生じてくるか，注目しておかなければならない点であろう。

さて，いわゆる過疎を生みだしてくる心理的なメカニズムについての試論の中で，われわれは，(1)生活の変貌 (2)現金追求の悪循環，(3)村の魅力の喪失　の3点を指摘した（続有恒ほか，1970）。このような現象が家族関係にどのように影響しうるか，また，実際に得られたデータにどのように関連しているかが，ここで次に討論すべき問題となる。

従来の家父長制度が，新しい憲法の下で否定されたとしても，そこでの作業が農業であったり，林業，あるいは酪農といった土地につながった仕事であるかぎり，それはいわゆる「家業」としての意味を持ち，家族のメンバーすべてが「家業」維持に従事するなかで，旧来の生活パターンを守り通し得たといってよいであろう。そして，「家業」であるが故に，そこで生じてくる技術の進歩による発展も，いわば「自我の肥大」といった形で受け入れることのできるものであったと思われる。そこには，仕事に対して主体的なかかわりを持つものとしての誇り，明確なアイデンティティの存在を予想することすらできたのである。

ところが，現実には，生活の基盤を提供するはずの家業が，生活水準の向上に伴なってその役割を果せなくなり，その家業を中核にしてアイデンテイテイを形成していた層は著るしい危機状況にさらされることになったといえる。そして，ひるがえって，必らずしも主体的にこの「職業」を選びとったのではないことに気づいた時，自分たちのような生活をわが子にだけはさせたくないと思うようになり，あるいは，自分の息子にはあととりとしての嫁を欲っしながら，自分の娘だけは農家に嫁がせたくない，といった気持を明確に意識化しだすようになるのであろう。

このような意識化がすすみ，「家族のエゴイズム」が露呈されてくる中で，旧来の利益の共通性による連合体として成り立っていた「村落共同体」（中村，1971）はその存立の基盤を失ない，従来のむらの人々をしばりつけていた「世間体の悪さ」の意識は次第に希薄化されてきたと考えられる。

長男を都会で就職させるということは，以前は世間に顔むけのできないような恥ずべきことですらあったであろうが，現在では，なかば羨望をこめて「先見の明があった」という評価すら与えられるようになっているのである。

しかし，重要なことは，こうしたアイデンティティの在り方や，村落共同体の規制力の弱化にとどまらない。

＊　平均70アールの水田とわずかの山林と和牛を持つ島根県の弥栄村が昭和35年から昭和40年の間に34.8％の人口減少および226戸の戸数減があったのに，その調査者の住む山形県上山市山元地区（〝やまびこ学校〟で著名）では，水田が35アール，畑が30アールぐらいで，どの農家も〝通年出稼ぎ〟に出ながら，人口の減少は同じ時期に14.7％，戸数は16戸しか減少していない。それをいぶかっているというものである。（中国新聞社編，1967，357－358pp）

＊＊　東北の内向性を「エジコ」による育児のせいだとする見方をとりあげている。

＊＊＊　われわれの資料を分析してみたところ，言語のもつハンディキャップの意味も無視できないと思われる。（松田，1971）

このような価値観の変動の中で，個々の家族がその自立性を主張しはじめると同時に，そのメンバーである一人ひとりの家族が，特に若い世代が，その自立性を主張しはじめたのである。今や，子どもがどのような役割意識をもっているかということが親の気掛りな点であり，またそれを正しく認知することが親にとって困難な課題となってきつつあるのである。

福武（1969）は，村落共同体崩壊の動きを「かくされていた利己主義」が表面にあらわれるようになったことにあるとして捉え，しかも，現在未だ「利己主義が個人主義にまで成長していない」段階にあると見ている。そして，本来的な「個人主義」の社会が成立してくるためには，「農業が家業だ」という意識が捨てられ，一つの企業として確立され，一つの職業として自由に選択できるようになることが必要だとしている。これと同様の提案は米山（1969）にもみることができる。

少なくとも，われわれが入手することのできた資料からは，「家族の利己主義」の存在を見ることができ，「個人の利己主義」は未だ明確に捉え得ないものであったが，例えば「甘やかし」といった親の構えの中に，その動きを見ることはできた。このような段階から個人のレベルに至るまでの「個人主義」を家族関係の中でどのように展開させるかは，今後の大きな課題といえよう。

このように役割期待といった側面から見てくると，いわゆる過疎による家族関係の変化の問題は，まさに，現在の農村社会において一貫して存在する家族関係の基本問題であり，それが過疎の進行の中でますます際立ってきつつあるといえる。このことは特に，「過疎」の規定を一応行政レベルの指標に置く限りに置いて当然のことであろう。そして，過疎の進行の中で，行政レベルでの農業が再編成の危機にさらされているのと同様に，「家業」を中心として，村落共同体の中でその命脈を保ってきた「家」の階層的秩序が，根本からゆすぶられ，個人に根ざした新しい家族関係へと脱皮していくための危機的場面に直面させられている，と見ることができるのである。

すでに資料集にまとめられている長野県上村，熊本県水上村の分析がまだなされていないため，地域間の比較については不十分な点があり，それらの分析をまって，更に検討を進めていきたいと考えている。

付記：この小論は過疎研究グループの主宰であられた故続有恒教授の助言・指導の下にまとめられたものである。謹んでこの小論を御霊前に捧げるものであります。（松田記）

文　献

中国新聞社編：中国山地（上）　未来社　1967
福武　直：日本の農村社会　東大出版会　1969
今井幸彦：日本の過疎地帯　岩波新書　1968
松田　惺：面接法における応答水準の問題―「いわゆる過疎地域の家族関係」の調査を通して―　名城大学教職課程部紀要，1971　4，31―46
中村吉治：日本の村落共同体　日本評論社　1971
祖父江孝男：県民性―文化人類学的考察　中公新書1971
続有恒ほか：いわゆる過疎地域の家族関係（1）―序報（その1）―名古屋大学教育学部紀要　1970，17，47―62
続有恒ほか：いわゆる過疎地域の家族関係（2）―序報（その2）―名古屋大学教育学部紀要　1971，18，17―32
米山俊直：過疎社会　NHKブックス　1969

STUDIES ON THE INTER-AND INTRA-FAMILY RELATIONSHIPS IN THE SO-CALLED "KASO" (TOO-THINLY-PEOPLED) COMMUNITIES (7)

—Householders' role-expectancy to their own children(1): Comparison of two districts, Numa-no-Dai (Yamagata Prefecture) and Tombara (Shimane Prefecture)—

Sei MATSUDA, Aritsune TSUDZUKI and "Kaso" Group

The purpose of this report is to analyze family relationships in connection with the identity about householders' occupations and their role-expectancy to their own children. Data were collected on the basis of unstructured interview to the householders in the so-called "Kaso" (too-thinly-peopled) communities.

Comparing householders' responses across two representative districts, Numa-no-Dai (ND; Yamagata Prefecture, North-East in Japan) and Tombara (TB; Shimane Prefecture, South-West in Japan), we could find some differences between them; the identity about their occupations was more stable in ND group than in TB group; ND group had more reliable role-expectancy to their own children than did TB group.

We also found that householders perceived it with uncertainty that their children were unwilling to stay in the communities, and that the younger householders (forties or younger) had more diffuse identity about their occupations than did olders.

Differences of responses across two districts were discussed from the view point of geographical characteristics, and also socio-cultural one. Discussing the effects of the psychological mechanisms of the decreasing population upon the family relationships, such tendency was suggested that egoism at the individual level, as same as the familial one, was coming in to the open. It is very reasonable to suppose, however, that such "egoism" can become true "individualism" in near future.